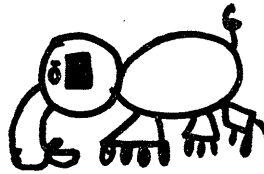


# 生命をかつぐって重いなあ

教育の中における障害児差別について

福井達雨

施設で働くのは大変や



「先生、就職の相談にのっていただけませんか」

就職期になると、私の講義をうけている学生が、何人か相談にやってくる。

「そうやなあ。知恵おくれの施設で働いたらどうや」と言う。

「ちよっと考えさせてください。よく考えて決断します」と、ほとんどの学生がこんな答をする。

「決断とはなあ、考え考えたすえにするもんやあらへんで。あるものに出会った一瞬に、今までと違う道に、激しくジャンプすることや。人間は、考えるだけからまわりをしまつて、何の決断もできへんもんやで」

「よくわかっていきます。でも、やっぱり考えさせてください」

「知恵おくれの子どもの教育は、生きがいがあるもんやで。ぼくはなあ、頭はこんなにハゲて、デブの四十歳のおっちゃんになつてしまつたが、心の中には、情熱がいっぱいで、君たちよりも若いんや。これも、重い知恵おくれの教育や、差別の戦いにつつかってきたからや。そら、苦しいことも悲しいこともいっぱいあったで。でも、不思議なことに、むなしいことは、一度もなかった

んや」

「先生と話していると、若い私たちが老人で、先生の方が若く思えてしかたがありません。うらやましいです」

「そうやったら、この知恵おくれの子どもたちの教育にぶつかってみたいひんか」

こうして、二、三日たつと、

「やっぱり施設で働くことは無理です。幼稚園か保育園の先生になります」

学生たちの答は、こんな言葉で返ってくることが多い。

「どうしてや」

「そら、施設は、しんどくて大変でしょう。それにくらべると、幼稚園や保育園は、楽です。あのような大変なことは、私にはできません」

こんな時、私は、たまらない孤独と悲しみ、そして、怒りと矛盾を感じるのである。

### 地球より重たい生命



子どもの生命。誰もおかすことができないほど大切なもの。一

度おかされれば、二度と生きかえることができないほど大切なもの。地球よりも重たいほど大切なもの。この大切な重たい生命を、真剣にかつげばかつぐほど、その重みで、疲れるのは当然である。

それが、重い知恵おくれの子ども生命であったとしても、障害をもたない子ども生命であったとしてもかわりはない。

もしも、幼稚園や保育園の方が、障害児教育より楽だと思いうら、それは、その子どもたちの生命を、真剣にかついでいないのではないだろうか。

また、現代は、資本主義機構の中における生産性社会である。

ここでは、目に見える生産性のないものは、無用のものとされ、重い知恵おくれの子どもたちも、生産性がない人間として、捨てられることが多い。

しかし、障害をもたない子どもたちは、生産性がある人間として、国からも社会からも大きな期待をかけられる。必然的に、この子どもたちには、いろいろな規制が生まれ、子どもの目に見えない心や生命を、おかすことが多い。

教師にとつても、上から決められた目的で、子どもたちに、現象的な効果を求める授業をおしすため、本当に教師として、自分のもっている信仰や、理想や、情熱を、子どもとの人格接触の

中でうえつけることは、むずかしくなってきた。

教育の世界で、教師の心が生きなくなつて、真の教育が育つのであるか。

このような現実をみつめた時、幼稚園や保育園の子どもたちの心や生命のことを、真剣に考えれば考えるほど、良心的に行動すればするほど、教師は、疲れ、大変になっていく。

重い知恵おくれの子どもに対しては、生産性がないために、国も社会もあまり期待をもたず、比較的上からの規制も少なく、教師側は、自由な教育をすることができ、自分の内に秘めているものを生かす場所もたくさんある。この意味で、重い知恵おくれの教育の方が楽だといえるのではないだろうか。

本質的な考え方をすれば、現代社会の中における教育は、重い知恵おくれの教育をしている私たちよりも、幼稚園や保育園の教師の方が大変で、生命の重みで、疲れはてざるをえないのではないかと思えてならない。

### 楽しいものです

重い知恵おくれの子どもの教育の中で、大切なものの一つに、



排尿便指導がある。

真夜中の二時ごろ、急に用事を思いだして、私は学園に行つた。

宿直の保母が、ニコニコ笑い、子どもに声をかけながら、夜尿おこしをしていた。

ふとんの中にもぐりこんでいる子どもを抱きおこし、手をつないで便所につれて行く。

もうオシッコをたれて、グッショリとふとんをぬらしている子どももいる。

保母は、手際よく、ふとんやパジャマをかえていく。

「こくろうさんやなあ。排尿便指導は、この子どもたちの教育の中で、一番大切なもんや。がんばってや」

私は、声をかけた。

「先生、真夜中の夜尿おこしは大変ですけど、でも、楽しいものですね」

保母が、イキイキとした目で、私を見つめ、こう答えた。

この保母の気持ちに、私は、深い同感をもった。私も夜尿児起こしをすることがある。

子どもを起こして、便所につれて行く。子どもは、必死になつて私の手にすがりついてくる。こんな時子どもの小さな手と、私

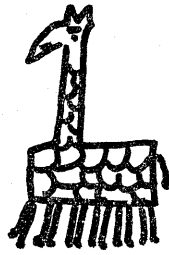
の大きな手のしっかりと結びつきから、子どもの強い信頼を感じ、温いものが、もえてくることが多い。

信頼が絆きずなになっていく教育ほど楽しいものはない。

子どもたちのウンコやおシッコにまみれても、真剣に子どもたちの生命の育はぐくみをするには、楽しくて、すばらしいことである。

宿直の保母が、楽しいものですと言った言葉の中に、私は、教育者としての歩みと、重みをシミジミと感じたのである。

効果のないものは無駄です



「真夜中に子どもを起こすのですか。大変ですね。しかし、それだけ教育をすれば、夜尿児よせうじが治り、大きな効果があるでしょう。」

と、たずねる人も多い。

「イヤ、一生かかっても、夜尿の治らない子どももたくさんいますよ。」

と言うと、驚いた顔をして、

「そんな効果のないことは、やめた方がいいですね。保母さん

たちが大変でしょう」

と言われる。

この現代の生産性社会は、どんなことでも効果を求めてものが進んでいく。教育の世界でも、効果を上げることが、教育のポイントになってくる。そして、効果を上げる授業や勉強が、花さかりである。

しかし、教育の効果とは何だろうか。

生産性社会の中における効果は、機械的效果である。表面に見えるもの、そして、現象面的に、人間に利益をもたらすものが、重要となってくる。

教育の効果とは、人間の奥深い中に育つ効果であり、目に見えない本質的なものが必要となってくる。

機械的效果と、教育的効果が、同一視される現代の教育は、おそろしいものである。

そして、「効果のないものは、無駄ですね」と捨てられてしまう世界は、子どもの心を殺してしまう。

止揚学園の子どもたちは、精神年齢が、平均推定三ヵ月位の子どもであるため、発達が非常に小さい。

障害をもたない子どもたちは、一日一日と発達していくが、止揚学園の子どもたちは、一年にどれだけ発達したかをみつめなけ

ればいけない。中には、少しも目に見える点では発達しない子もある。

しかし、その子が、リズムの時間、みんなの中に入って、仲間と手をにぎりあっているだけでも、すばらしい教育の効果が生まれていると、私は考えている。

「重い知恵おくれの子どもたちは、社会復帰ができない」と言われるが、それはまちがいである。たしかに、この子どもたちは、今の日本では就職は不可能である。

就職するということは、社会復帰の一部門であって、それが社会復帰のすべてではない。たとえ就職ができなくとも、この子どもたちが、汗を流し、立派な重い知恵おくれの子どもとして生き、歩もうとしている姿を目にした時、この子どもたちは十分に社会復帰をしているのだといえるのである。

この重い知恵おくれの子どもたちが、歩む歴史は、偉大な人間の歴史なのだ。

このような考え方、効果観が、現代の教育の世界に必要ではないだろうか。

十月十日、止揚学園の運動会が行われた。

この運動会は、能登川町の人達も多数参加して、町の年中行事の一つになっている。

走れない子が、町の人たちにおぶさって走っている。その必死な子どもの姿に、何ともいえない美しさを感じる。この子どもたちの目に見えないものの中に、すばらしい腸物や生命が、いきづいていることを感じる一瞬である。このいきづきこそ、人間そのものの姿である。

しかし、それが目に見えないと無視される今の社会の中で、重い知恵おくれの子どもたちと共に歩みながら「生命をかつぐって重いなあ」と、シミジミと感じる今日このごろである。

(止揚学園 カットも)

